

日本史 B 「唐風文化と平安仏教」

- 仏教文化を軸とした歴史的展開への試み -

岐阜県立大垣南高等学校

大橋 弘志

目次

はじめに

単元「第2章 律令国家の形成 5.平安朝廷の形成」の指導と評価の計画

学習指導案「唐風文化と平安仏教」

参考資料1 学習指導案「天平文化」

参考資料2 生徒の反応

参考資料3 文化史と倫理

はじめに

1. 歴史の授業における文化史の扱いについて

高等学校の歴史教育では、いかにして早く多くの知識を獲得するかという効率性重視の学習が求められている。授業の展開はやはり政権交代の歴史が中心となり、それに付随した事件や法令の名称と意味の理解に重点がおかれる。だれがどんな政治をしたかについてより詳しく深い知識が要求される。知識の定着のために演習を行なうことにも時間を使う。この指導方針によって犠牲になるものが文化史に対する授業指導であると考えられる。教科書、資料集に羅列されている作者・作品名をすべて覚えるよう指導し、特に解説をすることもなく整理型の演習問題を与えることですませていくことが多い。

本来、歴史教育においては、政治史と文化史の間に大きな区別があるわけではなく、むしろ総括的な立場から個々の史実を考察するという態度が歴史教育の姿であると考えたい。しかし、政治史と文化史を区別しないからといって、単なる逆転の発想で文化史から先に教えるだけではこの問題点の解決にならない。歴史認識の方法論に再考を迫る意味で、1989年改訂の学習指導要領から「日本史A」という科目が設けられた。しかし教室での「日本史A」は、従来の日本史の近現代史だけを切り取ったものと考えられ、同じ方法論で黒船来航からの政治史を軸にした日本史について年代順に授業が行なわれている。さらには、授業の担当者の多くは、途中からの日本史では歴史用語の意味が理解できていないので授業をすすめるに苦しいと言っている。年代順の政治史の展開が歴史教育の中核をなすという立場を離れることは難しいようである。

歴史教育の原点に立ち返ってみると、政治史が歴史教育の中心であるという型はいつごろから出来あがったのであろうか。古来中国では、政治を国家や国民の最高の価値として位置づけて大切にしてきた。根底に流れる儒教思想の影響は大きく、自国が華(文明)であるためにはどのような政治をすればよいかという観点で、国家のあり方、人間のあり方を理念化し、理論的に政治のあり方を説いてきた。最高の価値ゆえに、その時の為政者の政治が善政であったことを記録しておくことにエネルギーを費やし、歴史書として残されたと考えられる。古代の日本の政府は、こうした中国の姿に近づこうと努力し、政治システムと都の形だけを輸入した。

私は歴史認識の柱として共感というテーマを考えてみたい。為政者の名や法令名を順に覚えることで歴史教育を終わらせるのではなく、視点を変えて共感的な理解による歴史認識のあり方を考え直してみたい。当時の日本人が思想・宗教・信条を含めてどのような考え方をしていたのかを追求し、人々の生き様の背景にあるものを浮き彫りにすることができれば、それに基づいた道徳観が形成されていることに気づき、も

のごとの善悪の基準もその当時の固有の価値判断であることがわかる。こうした価値判断基準から法令の内容を考えることもできる。思想・宗教的な背景を示しているもの、人々の生き生きとした暮らしぶりを探る手がかりとなるものは、やはり当時の文化であろう。文化史に登場する作品を創りあげた人物の考え方、またそれを鑑賞し感動した当時の民衆はどんな考え方をしていたかなど共感的な理解を通して、思想・宗教的な背景の理解にまで高めていく指導を工夫したい。佐藤正英は「人々が何を信じ、何を愛し、何を願っていたかをとらえようとする」ことが文化を学ぶ姿勢であると述べている。

2. 古代仏教史を軸にした教材観

7世紀以降、日本の指導者層はさまざまな形で仏教と関わってきた。日本人の精神文化の中でも仏教の存在は大きなものとなり、人々の考え方にも深く関わっている。6世紀の受容期には、「きらきらかがやく美しいもの」と表現された仏像の形で入ってきた。日本古来の信仰はあらゆるものに霊の存在を感じるというアニミズムを基層としており、霊の崇りを畏れ敬い祠をつくって祀るという素朴な祈り(古い形の神道)だった。つまり目に見えないものへの畏敬をあらわすことが信仰の姿だったと考えてよい。しかし、仏教は全く異なり、突然姿の見えるもの、しかも金色に輝くものとしてやってきた。以来、受容についての論争がおこり、受容後も日本の神々の中の一つと考えられ、人々は崇りを畏れた。

しかしあまりにもはっきりとした実像ゆえに、いつしか在地の神々よりも貴ばれ、その加護のパワーも強大なものと考えられてきた。折しも、隋や唐から鎮護国家思想が輸入された。これは国家の安泰を願うものであり、言いかえれば、天皇の権威を護るという意味をふくんでいた。この思想を掲げた平城京の朝廷は、学派を形成して学問として経典を研究させ、国分寺の建立と大仏の造立を命令し、ますます国家仏教の存在価値を高めていった。そして仏教界は勢力を拡大し、政治のあり方まで支配していた。ここでは仏教は個人の救済を目的としていないことをしっかり理解させたい。

つづく平安仏教では、密教がカギとなる。密教には、インド仏教の本来の姿である個人の解脱の要素が含まれ、即身成仏を掲げ個人が成仏することによって救済されることをもとめている。天平期の仏教との大きな違いに気づかせたい。国家仏教とは異なる路線を展開する平安仏教は都を離れ、政治との関わりをなくし山に入る。こうして、日本古来の山岳信仰と結びつき修験道が確立されていく。山には神々が住み、神々の世界があり、人々の信仰の対象となっている。日本的な自然観は山への信仰が原点となっている。そこに密教の教えが入り、仏に近づくための呪力をいかにして身につければよいかを考えるようになる。この神々の世界の広がりを宇宙と

表現するならば、密教の目的は自分がいかにして宇宙と関わるかということになる。このスケールの大きさと、日本人の信仰心の原点にあたる自然観を理解させたい。

3. 授業の展開例の提案

主に文化史を教材とした歴史教育において指導と評価の連動を考えると、生徒の共感をいかに引き出すかが主題となる。文化史を教材として共感的な理解が得られるような展開を工夫し歴史全体の認識につなげたいものである。とくに仏教文化史を歴史教育の軸と考え、まず思想・宗教・信条を含んだ背景を理解し、支配者層と民衆がそれぞれ何を信じ、どんなことを願っていたかを共感によってとらえ、その上で政治史を理解するという流れを確立していきたい。ここに指導と評価の一体化という方針を見出すことができるのではないかと考える。共感の場面をつくり、「思考・判断」させ「知識・理解」につなげる指導を実施することで、どのくらい歴史認識が深められたか、そしてどれだけ知識として定着したかを探ることができると思われる。

今回、文化史の扱い方として2つの展開を実施した。一方は参考資料1に示した「天平文化」の場合で、日本の仏教史を軸に並行して藤原氏の政界進出の政治史を追いかける文化史・政治史並行型の展開の方法である。もう一方は、学習指導案として示した「唐風文化と平安仏教」の場合で、天台宗、真言宗、神仏習合を解説した後に平安初期の朝廷の形成に移っていく文化史先行型の展開例である。生徒の反応については、授業の中でもっとも共感してほしいところを絞って質問紙に答える形で記入させ、できるだけコメントをつけて返すようにした。その結果、生徒はどちらの方法にも対応できることがわかった。仏教史の視点から仏教文化の展開を理解し、その上で政治の流れを解釈する方法は、ただの暗記として文化史を嫌う生徒を減らし、日本の歴史を幅広い視点から見つめることの面白さを学んでくれたように思う。

学校番号 23	岐阜県立大垣南高等学校	大橋 弘志
---------	-------------	-------

単元の指導と評価の計画 日本史B

単元名	第2章 律令国家の形成 5 平安朝廷の形成		
教科書	詳説日本史B(山川出版社)	副教材	新詳日本史(浜島書店) 詳録新日本史史料集成(第一学習社)
単元目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 仏教受容の時期から平安朝の時代までの古代仏教文化の特色を理解する。 ・ 平安遷都を軸に仏教政策の変化を理解し、遷都の意味を考える。 ・ 密教の内容と人々の信仰心や仏教に対する考え方を理解し、平安初期の文化を考察する。 		

単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断	資料活用の技能・表現	知識・理解
<ul style="list-style-type: none"> ・ 平安初期の政治基盤が確立されるまでの過程と仏教文化とのかかわりに課題意識を高め、現代に通じる仏教文化を意欲的に追究している。 ・ 真言密教の内容に関心をもち、修験道など神仏習合の傾向を、現代と照らし合わせて意欲的に追究している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 平安初期の政治基盤が確立されるまでの過程と仏教文化とのかかわりから課題を見つけ、現代に通じる仏教文化の変遷を考察している。 ・ 真言密教の内容を理解し、修験道など神仏習合の傾向を、現代と照らし合わせて日本人の宗教性を考察している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 平安初期の政治と仏教文化とのかかわりに関する史料を活用し、唐風文化を取り入れた背景を考慮して当時の仏教文化の様子を描いている。 ・ 絵画資料を活用して、曼荼羅図等から真言密教が伝えようとしているものを理解し表現している。修験道など神仏習合の傾向を示す資料を収集し、有用な情報を選択し活用している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 平安初期の政治基盤が確立されるまでの過程と仏教文化とのかかわりに課題意識を高め、現代に通じる仏教文化を理解し、知識として身につけている。 ・ 真言密教の内容を理解し、修験道など神仏習合の傾向を、古代宗教観のなかで位置づけ、歴史的、宗教学的な考察を深めている。

各授業時間ごとの主な内容

1. 唐風文化と平安仏教 密教芸術			
	主な学習内容	主な学習活動・評価の観点	評価の方法・指導
第1時間目	<p>平城京の時代の政治と仏教の関係について</p> <p>平安仏教の2つの柱、天台宗と真言密教</p> <p>神仏習合と修験道</p>	<p>奈良時代の政治と仏教と関係を確認する。【知】</p> <p>「信仰」という言葉をキーにして、南都六宗の僧がめざしたものと、民衆が願っていたことの違いを理解する。【思】</p> <p>遷都をした桓武天皇の考えに気づく。【思】</p> <p>最澄の天台宗について、奈良仏教との違いを軸に理解する。【知】</p> <p>空海の真言宗について、密教の意味を探り、個人の救済をめざした手法を理解する。【思】</p> <p>加持祈祷が流行していく様子を理解する。【知】</p> <p>神仏習合の状況を奈良時代から順に振り返る。【知】</p> <p>日本人の山岳信仰を軸に、修験道が生まれた背景を考える。【思】</p>	<p>意見発表</p> <p>遷都の意味について、発問により理解する。</p> <p>奈良仏教の特色が理解できているかをたずねる。</p> <p>貴族らが現世利益を求めて加持祈祷を受ける姿をイメージできる。</p> <p>民衆の精神的なよりどころとなっている日本固有の神々への信仰心について共感できる。</p>

2. 平安京の確立と蝦夷との戦い			
	主な学習内容	主な学習活動・評価の観点	評価の方法・指導
第2時間目	<p>桓武天皇による長岡京・平安京の造営</p> <p>東北地方の経営</p> <p>徳政論争のあと</p>	<p>平城京の時代は、政治が仏教勢力に支配されていたことから遷都に踏み切ったことを理解する。和気清麻呂の建議。【知】</p> <p>長岡京造営に絡んで皇太子である弟を処分した事件について、怨霊信仰という観点から理解する。【思】</p> <p>怨霊に怯える天皇が、比叡山の最澄に国家の安泰を祈らせたことを例に、当時の人々の御霊に対する信仰の様子を考える。【思】</p> <p>政府に帰順しない東北地方の蝦夷に対する制圧の歴史について、7世紀から振り返る。【知】</p> <p>坂上田村麻呂の蝦夷征討を図を使って理解し、奈良時代と平安時代のルートの違いを理解する。【技】</p> <p>藤原緒嗣による「軍事と造作」の批判を受け入れたことを理解する。【知】</p>	<p>人々にとって祟るとはどういうことかを例に、怨霊について理解する。</p> <p>祟りを鎮めるための神社だけでなく、最澄にも祈祷を依頼することから神仏習合を精神を理解する。</p> <p>蝦夷とよばれるのはどんな人たちかを考える。</p>

3. 平安初期の政治改革 地方と貴族社会の変貌			
	主な学習内容	主な学習活動・評価の観点	評価の方法・指導
第3 時間 目	桓武天皇による 政治改革	地方政治の改革として、国司の不正や職務怠慢を防ぐために、勘解由使をおく。【知】 郡司の子弟などによる質の高い軍団をめざす健児の制を実施する。【知】	国司の職務の現状、律令のもとでの軍団の現状を想像する。
	嵯峨天皇による 政治改革	薬子の変の処理を理解する。【知】 蔵人頭の設置が藤原氏北家の台頭につながることを考える。【思】 検非違使の設置に関して、令外官を整理しておく。【知】 格と式の運用の仕方について理解する。【知】	平城京への復帰を目指した理由を考える。
	班田収受のゆき づまり	偽籍がふえたことを史料で確認し、律令制度が実情にあわないことを理解する。【技】 負担軽減の方針と、税収不足の補填策の実施。【知】 班田を12年一班とする。雑徭を半減 財源確保のために中央官庁がそれぞれに田を所有 公営田や官田、勅旨田	初期荘園の経営方式を取り入れて、公営田、官田などが設置されたことにつなげる。

日本史B 学習指導案

教科(科目)	地理歴史科 日本史B	単元名	平安朝廷の形成 -- 唐風文化と平安仏教 --
本時主題	平安朝廷の形成期に平安仏教がどのように関わったかを考える。そのための手法として、先にこの時代の仏教のあり方を観てから、政治の流れを学ぶという方法を実践する。(文化史先行型) (1時間目/3時間)		
本時の目標	1 長岡京・平安京への遷都は、平城京の大寺院の影響からのがれるためであることを理解する。【知】 2 国家のための南都六宗の考え方や、個人の信仰の実践を重んじる平安仏教との違いを理解する。【思】 3 空海の真言密教の考え方や、その後の影響を考える。【知】 4 神仏習合の様子から、修験道の成り立ちと背景を理解する。【思】		
指導の内容・ねらい	学習活動	指導上の留意点・観点別評価	
復習と確認	天平期の鎮護国家思想に基づく国家仏教のあり方を確認する。 東大寺戒壇院で授戒した南都六宗の僧らが国家救済のための法会を行なうことについて理解する。 仏教が政治に介入したことによる弊害をあげる。 奈良仏教は国家の救済のための学問であり、民衆(個人)のものではなかった。	道鏡の事件など。【知】 奈良仏教には「信仰」という観点はなかったことを理解する。【思】	
平安時代の仏教	国家と仏教の分離を目指し、山林修行による清新な気風がおこる。 長岡京や平安京を造営するとき、桓武天皇は南都の大寺院を新しい都に移すことを認めなかった。寺院や僧侶を厳しく統制した。 桓武天皇が大寺院の移転を認めなかった理由は何か。	国家の費用で官寺を維持し、法要の費用も負担し、官僧への俸禄も支出したことを考える。 国家仏教の弊害が大きく、政治に介入しすぎている仏教を切り離したかった。【知】	
最澄の天台宗	地域にある天台宗の寺院を紹介する。 基本事項の整理 804年に還学生として入唐し、天台教学を学ぶ。桓武天皇の保護で比叡山を拠点として活動を行なう。 大乘仏教の精神こそが日本にふさわしいとして、人々の安心立命のため経典として『法華経』を選び、天台教学を日本に確立した。	例：谷汲山華嚴寺、横蔵寺のミラ仏 【関】 最澄－天台宗－比叡山延暦寺－桓武天皇【知】	
最澄とはどんな人か	804年に還学生として入唐し、天台教学を学ぶ。桓武天皇の保護で比叡山を拠点として活動を行なう。 大乘仏教の精神こそが日本にふさわしいとして、人々の安心立命のため経典として『法華経』を選び、天台教学を日本に確立した。		
天台宗について	奈良仏教とはどんな点が違うのか。 独自の戒壇院(=大乘戒壇)の創設をめざす。南都六宗側からの反発に対応して『顕戒論』をだす。	だれもが悟りを開く可能性をもつという考え方を示し、「信仰」する対象としての仏教を考えた。【思】 のちの鎌倉仏教の開祖たちが、比叡山で天台の教学を学んでそれぞれの宗派を開いたことを理解しておく。	
空海の真言宗	弘法大師伝説をいくつか知っているものをあげる。 基本事項の整理 山にこもっていた謎の多い青年時代を経て、『三教指帰』を書いて仏儒道三教のなかで仏教の優位を論じた。 804年、留学生として入唐し、密教の師恵果と出会い真言密教を学び帰国。その後、嵯峨天皇の信任を得て高野山と京都に寺院をもち活動する。 真言密教とは何か。	三筆、お遍路さんの「同行二人」、満濃池など【関】 空海－真言宗－高野山金剛峰寺、教王護国寺－嵯峨天皇 【知】	
空海とはどんな人か	山にこもっていた謎の多い青年時代を経て、『三教指帰』を書いて仏儒道三教のなかで仏教の優位を論じた。 804年、留学生として入唐し、密教の師恵果と出会い真言密教を学び帰国。その後、嵯峨天皇の信任を得て高野山と京都に寺院をもち活動する。		
真言宗について	真言密教とは何か。 密教：宇宙と自己の本来の同一性を目的として、秘密の呪法やさまざまな器具による儀式を通して悟りをめざすもの 『大日経』に説かれている大日如来のはたらきを表現したものを曼荼羅(マンダラ)という。 生きたままで仏になることが可能である(即身成仏)と説き、信仰を実践する仏教を示した。密教の儀式のひとつである加持祈祷は、その後現世での利が得られるという考え方につながっていく。 真言密教といわれる。	宇宙をはじめ山や森や泉などの神秘的な世界に積極的にいかかわり、仏の世界に接近していくことを理解する。【思】 即身成仏が目的であり、「個人の救済」をめざしていることに気づく。【思】	
加持祈祷の流行	貴族らを中心に真言密教が受け入れられ、天台宗でも弟子の円仁・円珍が入唐して密教を学んできた。台密といわれる。	円仁が山門派(延暦寺) 円珍が寺門派(園城寺) 【知】	
神仏習合	8世紀ごろからの神仏習合がすすみ、日本古来の山岳信仰(神としての山)と仏教の山林修行が重なる。修験道という。 修験道が生まれた背景を考える。 木彫の仏を作った行基や、山岳修行者でもある良弁の姿には、すでに神仏習合の要素があり、空海の登場によって神仏習合が完成されたとみる。	密教の呪法により即身成仏を実践していくことと、山や森に棲む神々がもつ呪力を得て山岳修行することが重なっていくことに気づく。【思】 仏像の素材が銅や粘土から木を使うようになったことに注意。【知】	

参考資料1 学習指導案

教科(科目)	地理歴史科 日本史B	単元名	天平文化
本時主題	国家仏教の成立までの過程を仏教受容の時期から順に振り返り、奈良仏教の性格を位置づけ、その思想のもとで展開される律令政治とかがわりを考察する。(政治史と文化史の並行)		(1時間目/2時間)
本時の目標	1 仏教が受容期からの変遷をとおして、どのように日本社会に受け入れられたかを考えさせる。【思】 2 天平期には、仏教がどのような機能を果たしたかを理解させる。【知】 3 仏教と律令政治とのかかわりは何かを考えさせる。【思】		
指導の内容・ねらい	学習活動	指導上の留意点・観点別評価	
復習と確認 仏教受容期のテーマ 仏も神の一つ、加護を願って崇拜	この時代の仏教に対する考え方を学んでから平城京の政治に入ることを確認しておく。 仏教需要期、おもに飛鳥文化の時期の仏教のとらえ方を振り返る。 外来思想である仏教をどのようにとらえていたかを想像させる。 族長たちは古墳に代わって氏寺を権威の象徴として考えていたことを理解する。	いわゆる仏教公伝で、欽明帝の時の歴史的事実を確認する。【知】 日本人にとって神は崇りを畏れと加護を願う対象である。その存在はイメージで考えていたが、仏教はいきなり形ある仏像としてやってきたことがイメージできているか。【表】	
復習と確認 仏教興隆期のテーマ 仏教による国家の加護	白鳳文化の時期の仏教に対する考え方をみる。 国家が仏教を統制したことを確認する。氏寺中心の仏教から、国家仏教という形へ移行。 国家は仏教に何を求めていたかを考えさせる。 政府は護国三部経(国を護ってくれるお経)のひとつの『金光明経』を、正月に国衛で読誦させた。	国家によって建てられた寺院をあげる。【知】 仏教に対し、護国のための「効能」を求めていることに気づくか。【思】	
天平文化の時代 大仏造立の詔が出されるまで 南都六宗の研究	鎮護国家思想を背景に仏教事業を推進した聖武天皇について考える。 僧が国家の上級役人として、仏教の学派、宗派の思想を体系的に研究するようになる。	中学校までに習った聖武天皇のイメージを引き出しておく。【関】 6つの学派をあげる。【知】	
行基の活動 悲田院・施薬院の設置	一方で、民衆は重税に苦しみ、宗教的な救済と同時に生産性の向上をもとめていた。 南都六宗のひとつである法相宗の僧行基が、説法とともに社会事業を行ってきたが、国家の弾圧を受けたことを理解する。 行基はなぜ国家から弾圧されなければならなかったのか。 723年以降、行基の社会事業の内容が灌漑用水づくり中心に変わったことを理解する。	官僧と私度僧が区別されることを理解し、僧とは何をやる人かを考える。【思】 三世一身法の史料から内容を確認する。【技】	
国分寺・国分尼寺の建立	藤原広嗣の乱(739年)にショックを受け、天災や反乱のない社会を願った。 741年 国分寺建立の詔 『金光明経』にもとづく。光明皇后や玄昉(法相宗)らのすすめも大きかった。	民衆に根付いている土着の神々への信仰心を土台にして、仏教の持つ「救済」の面を期待するようになることに気づくか。【思】	
大仏造立の詔の後 鎮護国家思想期のテーマ 仏教に託した国家の救済	南都六宗のひとつの華嚴宗の經典にみられる盧舎那仏の造立を発願した。『華嚴経』には「すべてのものを一つの原理にまとめていく」という考え方があった。 743年 大仏造立の詔 聖武天皇は大仏に何を求めたのかを考えさせる。 国力を尽くしての造立で752年に完成し、開眼供養を行なう。このとき聖武天皇は讓位し孝謙天皇の代。 行基、良弁らの協力によることをおさえる。	宇宙の中心を表すという金色に光り輝く大仏の姿をイメージする。 大仏を造立することで、国家そのものの「救済」を願ったことと同時に、自らの王権を護る意味も含んでいることに気づく。【思】	
律令国家とのかかわり	統治者や知識人たちは最先端の文明にあこがれ、鎮護国家思想と律令制システムを輸入するだけで国家というものができると考えていた。それらを日本的に受容していく様子を理解する。	思想と政治のかかわりが概観できるか。【思】	

参考資料2 生徒の反応

「天平文化」の授業(参考資料1)展開からえられた生徒の反応

1. 中学校までに習ってきた「聖武天皇」のイメージをあげなさい。

- ・ 仏教が大好きで大仏を造った人
- ・ 仏教をすごく信頼していた偉い人
- ・ 仏の力で国を治めようとして、人々から愛されていた人
- ・ 気弱な人というイメージ

2. 仏教の歴史からみて、聖武天皇の仏教に対する考えを簡潔に解説しなさい。

- ・ 世の中を救えるのは仏教しかないと思っている。
- ・ 疫病を治すだけでなく国の問題も解決してくれると思っている。
- ・ 国家そのものを救ってくれるものは仏教だと思っている。
- ・ 仏教は薬みたいなもので政治を楽にできると考えている。

3. 大仏(盧舎那仏)の造立に協力した行基とはどんな人だったか。

- ・ 民衆への社会事業を行ない、支持される人。
- ・ 民衆への布教とともに救済施設や灌漑用水をつくり、民衆から歓迎された。
- ・ 本物の僧ではないので、国家から取締りを受けながらも多くの民衆に支持された。
- ・ この時代に個人の救済を目的として布教活動を行なった。

4. 次の4つの語句を使って文章を作りなさい。〈聖徳太子、大官大寺、鎮護国家、行基〉

- ・ 飛鳥文化では聖徳太子が法隆寺や四天王寺を造るなど仏教への信仰心を表していた。白鳳文化では天武天皇によって大官大寺や薬師寺が造られ、国衙では護国のためのお経が読まれた。また、鎮護国家の時代は国家事業として大仏を造った。一方で、行基は個人の救済のために活動を始めていた。
- ・ 飛鳥文化では聖徳太子が法隆寺を造り、白鳳文化では国家仏教の立場で大官大寺を造った。そして、天平文化では仏教の力で国家を救済するという鎮護国家思想を取り入れ、六つの学派が学問としての仏教を研究した。その中の法相宗の行基は仏教を個人の救済と考え、民衆のために尽くした。
- ・ 聖徳太子のころはまだ仏像を神のように考え個人の加護をしてくれると考えていたが、仏教が国家の加護に効くと考えが変わっていったところに天武天皇は大官大寺を造った。聖武天皇のころは鎮護国家思想によって大仏造立の詔を出した。国家仏教に反して行基は遊行しながら民衆の救済を目的として社会事業を行っていた。

参考資料3 文化史と倫理

今回、古代・中世の日本の歴史には欠かせない仏教史を軸にした歴史認識の方法について提案をさせていただくことになった。文化史の中の仏教史を浮き彫りにして、共感をテーマに授業をすすめる方法を考えた。こうした視点は一朝一夕に身につくものではない。思想史を理解する科目としてはやはり「倫理」が考えられる。しかし現在日本史を教えている生徒は、「倫理」を履修していない。学習指導要領の改訂に伴い平成15年度入学生から教育課程の編成が変わり、「現代社会」の標準単位数が4単位から2単位に縮小された。このため、多くの高等学校で公民科の履修科目として「倫理」に代わって「現代社会」が選択されるようになった。本校でも1年次には「現代社会」を履修させている。今後、「倫理」を履修していない高校生が多くなっていくことに不安を覚える。

新学習指導要領によって「総合的な学習の時間」も実施されるようになった。本校では講座形式で「総合」を実施しているので、私は昨年度から「日本人の信仰心と‘もののけ姫’」というタイトルで授業を行なっている。映像教材を活用しながら、いかに共感できるかをテーマに日本人的なものの考え方や信仰心について深く考える機会を作った。幸いにも今年度日本史を教えている生徒の3割近くがこのときの講座の受講生だったので、思想・宗教に関して考えることにさほど抵抗はなかったようである。

人のあり方生き方を学ぶことは時代を超えたテーマである。倫理がほとんど履修されなくなっていく状況であるからこそ、日本史の中の文化史を題材にして思想・宗教・信条をどのように理解したらよいかを教える機会をつくる必要があるのではないだろうか。